



マーゴハンターの日常
～カルミアに起きたトラブル?～

「日用品はこれで終わりかな、後は食品だっけ?。」

「そうですね。」

「レンの必要なのは全部買えたの?。」

「大体は、まあ足りないのは先輩の所から貰っていくんで大丈夫ですよ。」

「.:寄生虫に巢食われるってこんな気分なのかしら、あたし干からびて死ぬのかな?。」

「安心したまえ、宿主は絶対に殺さない、それが寄生虫の生き様なのだよ。」

「何を誇つとるんじゃ。」

「!!?」

「わっ!、なんですか今の?、あ、もしかしたら緊急呼び出しとかですか?。」

アイシヤはレントを連れ立って買い物に来ていた。ある程度の買い出しを終え、他愛ないやり取りをしていると、アイシヤの日常使いしているスマホからアラーム音が響いた。それに驚くレントだがアイシヤの立場だと、あり得る緊急の呼び出しかと思いついてみるが、アイシヤは深刻な顔でスマホの画面を見ると…。

「.:…まあ似たようなもん。レン、買い物の途中だけど、急いで帰ろう、多分カルミアが倒れてる。」

「ルミアさん！あ、あ、だ、大丈夫です！、か！」

アイシャの自宅に帰ると、アイシャの言った通りカルミアが倒れていた。テイルブルにあった物が落ち散乱して、突然の発作にもがき這いずった果てに意識を失ったような倒れ方をしているカルミアの姿を見て顔面蒼白で慌てるレント。

「レン、落ち着きな、…カルミア、久々のヤツ？」

倒れているカルミアを抱き寄せたアイシャ、どうやらカルミアは意識があるらしい、しかしその息は浅く苦しそうに眉根を寄せ自力で動けないようだった。

「……はい……。」

絞り出すように出た言葉は蚊の鳴くような小さいもので、アイシャもカルミアの口に耳を近づけなければならぬ程だった。

「わかった、後は任せて、……あ、え、とじゃあレンは……どうしようかな……。」

「？、え、えつと、私はどうすれば……。」

アイシャは状況を飲み込めたようだったが、何故かレントに対しての指示を出すとなつて突然齒切れが悪くなる、アイシャがこういう時こそ頼りになるのを知っているレントが訝しんでいると、カルミアが何かを小さく呟いた。

「……え？、レンも連れて行っているの？」

「……おし…… っ…… げっ…… っ。」

「わかった、もう意識落としていいよ。」

「……So……」

「じゃあレン、カルミア背負って付いてきて。」

「は、はい！」

顔を閉じ意識を失うカルミア、
それを確認したアイシャは、
レントにはカルミアを背負うよう指示すると、
カルミアの自宅へと向かうのだった――。

「アームが固定したら髪をこの器具でまとめてあげて……、
そうそう、で、髪が光り出したらOK。」

出来たらここを押して、表示がグリーンになったら完了。
もし赤とか黄色だったら然るべき所に連絡がいくようにな
つてから待機してればいいからね。」

「はい、分かりました。」

倒れたカルミアを彼女の自宅へと
運んだアイシャとレントの2人、
そのまま地下室へと繋がる扉をくぐると、
そこは様々な専用機器が
並んだ特殊な部屋だった。

アイシャはカルミアの服を脱がし、
専用のベッドに寝かせると部屋の装置が作動し
現れた複数のアームが彼女の
義手足を外しそこに別の機器やケーブル等を
接続し宙で固定する。
最後にレントが髪をまとめると機器全体が
作動し各部が明滅し始める。

アイシャが言うには、カルミアのこの状態は
アリス・モス・オクトにみられる
特有の症状なのだという。

機械と生身が融合した体をもつのがオクトの特徴だが、
有機物と無機物が融合している事自体
普通ではありえない状態なので、
どうしても体に負担が発生してしまう、との事。

「だからたまにこういう事が起こっちゃうんだよね。」

その負担が溜まってしまおうと今回のように突然倒れて全く動けなくなってしまう、という事が起こるのだそう。

しかもこの負担の蓄積は自覚できるものではないものがあり、今回の様な現象がいつ起こるかはカルミア自身にも分からない部分があるらしい。

「でもそれだと任務中に倒れちゃう事もあるんじゃないですか？」

「流石に対策はしてるよ、

カルミアって任務中、戦闘形態を殆ど解除しないでしょ？あれはアニマウエポンとかサブアニマとかに負担を肩代わりさせてるんだよ。」

「そっぴえば、ですね。」

でも倒れてるルミアさんを見たときはホントに焦りましたよ、ルミアさんって完璧なイメージあったので、そういう人のあいう姿って、本当に血の気が引きますよね。」

「あはは、気持ち分かるよ、

でもコイツが完璧ってのは賛同しかねる。」

「真顔で酷い事言わないでください。」

それにしても、ルミアさんの家には何度も来たことはありませんが、こんな部屋があるとは知りませんでした。」

「ああ、この部屋に入った事があるのはあたしだけだからね、レンで多分2人目だよ。」

「？、そうなんですか？」

「今のカルミアめっちゃ無防備でしょ？、カルミア、それを見られるのを嫌がるんだよね。まあ完全に無防備だから仕方ないっちゃないんだけどね。」

「え、じゃあ私来てよかったんですか？」

驚くレントに苦笑しながらそう説明するアイシャ。先程のアイシャの歯切れの悪さの理由が分かった。レントだが事情を聴いて踏み込んではいけない所に来てしまったのではと心配になってしまう。



「さつきカルミアがいつてさ、
…それだけ信用されてるって事だよ。」

「…えへへ、なんか嬉しいです。」

「まあ2、3年に一回あるかないかの
酷い風邪みたいなものだから、
あたしが仕事で行けない時は頼むね。」

「了解です!」

「……。」

「ところでレン、
カルミアがこうだと今日の夕飯は難しいから
ちよつとパシられてくれない?」

「買い物途中でしたもんね、
じゃあパシってくるんで、何買ってきます?」

アイシヤはカルミアの処置が一段落したことで、
自分達が買い物の途中だったことを思い出し
取り急ぎ今日の夕飯のお使いを
レントに頼んできた。

「ん、あたしは」

「カルミアが目覚めるまで見てないといけないから、
調理済みの方がいいよね。」
「じゃあカルダモンに言ってみ繕ってもらってきてよ、
事情を離せば大丈夫だから。」

カルダモンというのは近くの町にある食事処の名で、
味が評判でいつも繁盛しているのだが、
アイシヤが行くと何故か直ぐに席に付ける為、
よく利用するようになり味も気に入った事もあって
すつかり常連になり店長や店員とも
懇意にしている何故かマールゴハンター達が集まる
マールゴハンター御用達の店である。

「分かりました、行つてきますね！」

そう言つてレントは部屋から出て行った――

「……さて。じゃあ落書きを……」

「するのはよししてくださいね。」



レントが出ていった後、
アイシヤはテールに置いてあったペンを発見し、
眠っているカルミアの顔に近づけようとした所で
その悪行が止められる。

「なんだよ、起きちやったのかよ、つまんない。」

「もう、また子供みたいな事を。」

「…お手間をとらせました…」

「別に手間なんかじゃないよ、具合はどう?。」

「はい、大分元に戻ってきました。」

「久しぶりだったね、
あの着信音はいつも肝が冷えるよ。」

「はは、本当にすいませんでした。」



「でもカルミアがあたし以外の人をここに入れると思わなかったよ。」

「レンちゃんだったらいいかなと思ひまして。」

「それは、あたし的に嬉しいかな。」

友人に弟子が認められたような感覚にアイシヤの顔に笑みが零れる。

「…あの、それと、レンちゃんをお使いをお願いしてくれたのは…助かりました。」

「ん、ナンノコト？」

そう言うカルミアだが、どうにも言葉に詰まったように齒切れが悪い、そしてその理由が分かつているのか答えるアイシヤの顔には若干の邪悪さが漂う。

「もう、…その…体が熱くなつてしまつていゝので、…いつもの…お願いできますか？」

「も、しようがないにや、ここに入れたんだからレンも一緒に良かったんじゃない？」

「いや、それはまだ心の準備というか、レンちゃんの私のイメージがありますし。」

「今更イメージとか気にするかね、まあいいや、失礼しますよつと。」

アイシヤはカルミアの背後に回ると、その大きく柔らかな乳房に指を埋める。



少し揉んだだけ、まだ愛撫という段階にも至っていないが、早々にカルミアの乳首から絶頂時特有の母乳の噴出が起こる。

「ちよつと敏感過ぎない?」

「ん、はあ、あ、好きな人に触れられると、直ぐに気持ちよく、なれるんですよ、あ。」

「ふん、お前、無理しただろ?」

「いえ…そういうつもりはなかったのですが…。」

カルミアのこの不調だが、実は倒れる程の発作が起きた時には、体中が相当な激痛に襲われ、それはこの装置に繋がるまで続く。

だがこの激痛は別の感覚に置き換える事が可能で、カルミアはそれを快感に置き換えており、その昂った熱はアイシャに沈めてもらうというのが恒例なのだ。

しかしこれだけ敏感になっていくという事は、長い時間この状態になっていたという事になる。

「自分で何とかしたいなくと頑張ってみたんですが、その…無理と思つた時にスマホが思つたより遠くにありまして…。」

「なんで手元に置いておかないかな。」

こういう時、いち早くアイシャの元に緊急連絡が入るようにしているのだが、発作が起こってから対応するしかない為、任務時は義手義足やアニマウエポンに内蔵した機器で緊急信号を出すようにしている。

だが普段使いしている義手義足は生身に近い特別製で、そういつた機器を内蔵できない為、スマホなり携帯端末で行うしかないのだ。

そして今回は不運にもそれが色々と上手くいかなかったという話だったのだ。

「いざっていう時電話って手元にないですよねえ?」

「そんな事も無いでしょ。」

「所でアイシャの携帯は今どこに?」

「.....あつちにおいてある。」

入り口近くのテーブルに置いてあった自分のスマホを取りに行きコンソールに置く。

「ね、携帯って.....あつアイシャ、あ、んっ♡ふあっ♡!。」

「いやー運が悪い時って重なるよね。」

「ちよつと、んふあ♡、そ、そんな誤魔化し、かたっ♡あんっ♡!。」

お説教しようと思つたら機先を制されたばつの悪さをアイシャはカルミアの乳房を揉みしだき誤魔化すのだった。

「んあ、んんっ♡!。」

「簡単にイっちゃうね、ちよつとキツイ?。」

「はあ、はあ、大丈夫…です。」

この短時間で何度目かの射乳、おそろくは快感に変換した痛みに、晒され続けた時間が長かった故に、体が過剰に敏感になっっているのだろうと予想は出来たが、辛かったら困ると声をかけるアイシャ。

「あの…もうちよつと、強くして…ください。」

問題ないと分かると、今度はカルミアの最も敏感な乳首に取り掛かる事にした。

「OK。」

「んふぁ、はぁんっ♡
はっ♡♡♡♡♡
あん♡♡♡♡♡
んあああ♡♡♡♡♡!」

敏感な乳首を弾かれる度に
その肢体がビクビクと震え、
快感が頂に届けば乳房からミルクが噴き出す。

噴き出した母乳なのだが、地面に落ちる事無く、
まるで無重力空間の水のように、カルミアの前で
フワフワと空中を漂い、
それを別の装置が吸い上げる。



「これ面白いよね。」

「んっ♡…わたしは、ちょっと、んっ♡。」

「なんで?、マージョが作ったから?。」

「は♡、あん♡、はい。」

「でも前の搾乳機みたいのよりいいんじゃない?、
こっちの方があたしは好きだけどね。」

「それは、そうですね…ん、んふう♡♡♡。」

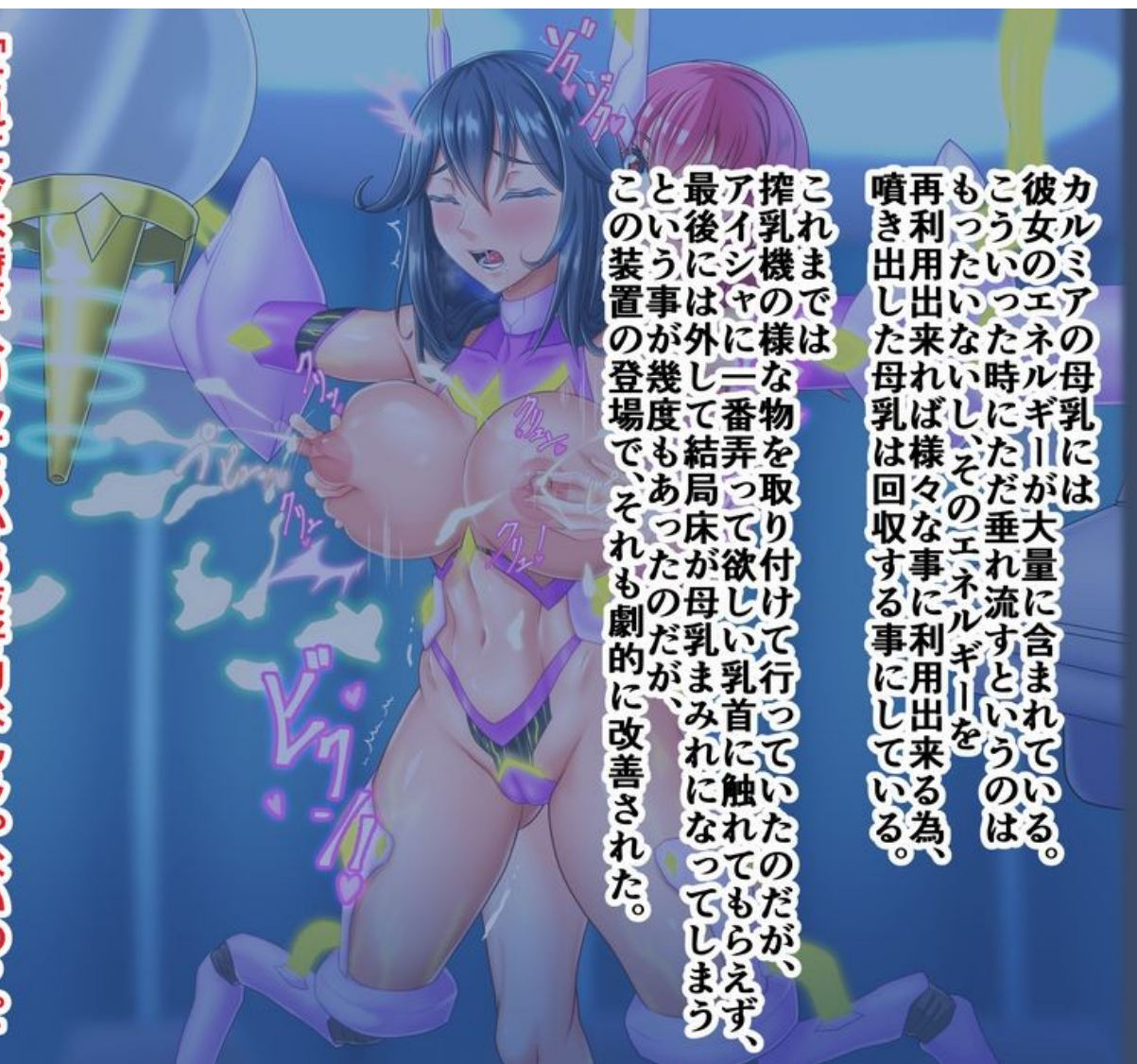
カルミアの母乳には彼女のエネルギーが大量に含まれている。こういった時にただ垂れ流すというのはもったいないし、そのエネルギーを再利用出来れば様々な事に利用出来る為、噴き出した母乳は回収する事になっている。

これまでは搾乳機のような物を取り付けて行っていたのだが、アイシヤに一番弄って欲しい乳首に触れてもらえず、最後には外して結局床が母乳まみれになってしまうという事が幾度もあったのだが、この装置の登場で、それも劇的に改善された。

「それに今は特区入りしてるから友好的なんじゃないの?。」

「あれは、そういうのじゃない気がします…。」

「まあマーゴだもの、友好的になつたんだから一回エロい事されたくらい許そうよ。」



この装置の開発にはあるマーゴが関わっており、
しかもカルミアはそのマーゴに敗北を
喫した経験がある。

ある時そのマーゴの目撃情報を得たカルミアは
アイシヤと2人で現地向かったのが、

問題のマーゴは白旗を振りながら

特区入り希望してきたのだ。

最初は罠だと殺そうとしたカルミアだが

マーゴは泣きながら土下座しながら

特区入りを懇願しまくった。

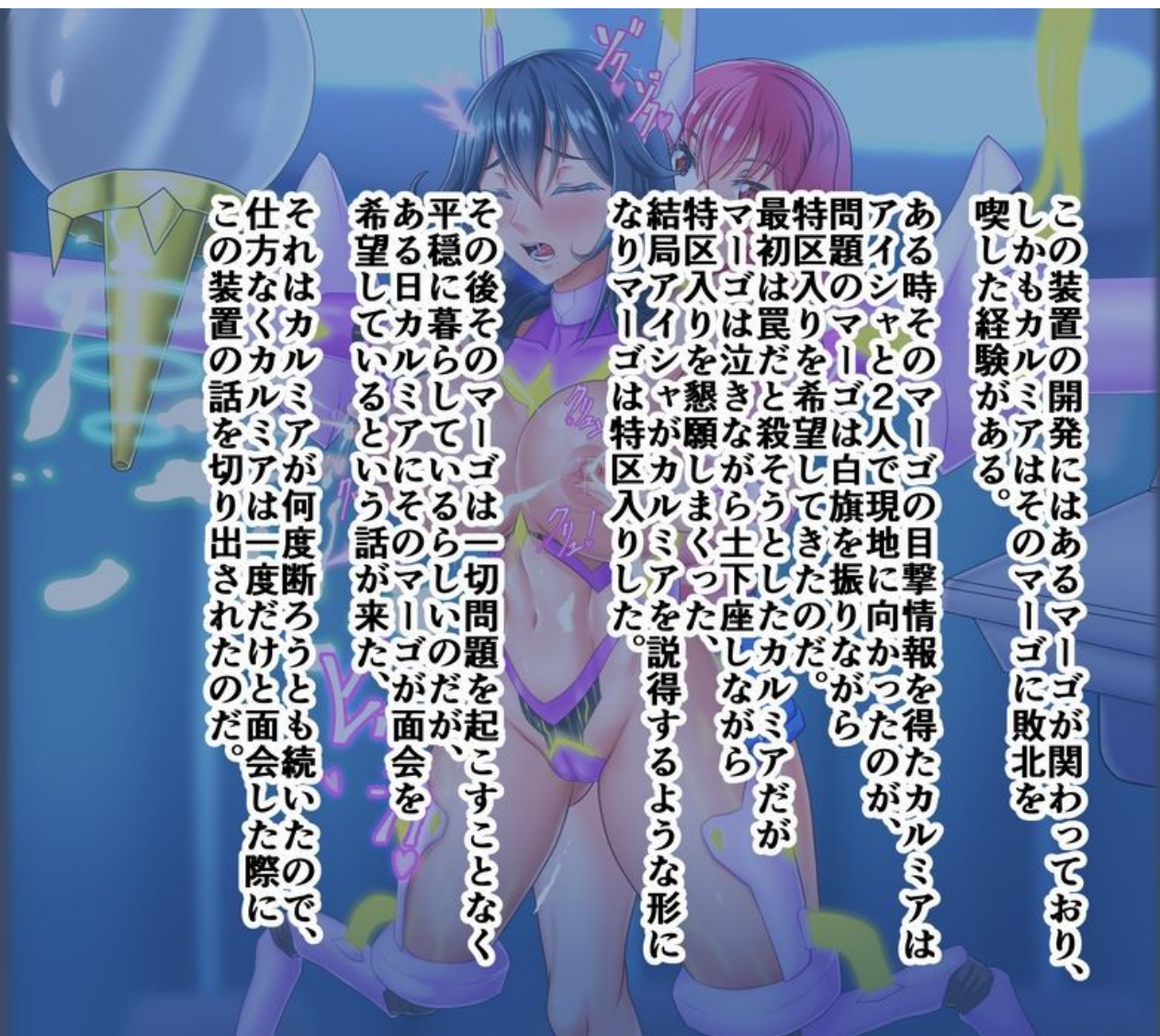
結局アイシヤがカルミアを説得するような形に
なりマーゴは特区入りした。

その後そのマーゴは一切問題を起こすことなく
平穏に暮らしているらしいのだが、

ある日カルミアにそのマーゴが面会を
希望しているという話が来た。

それはカルミアが何度断ろうとも続いたので、
仕方なくカルミアは一度だけと面会した際に
この装置の話を切り出されたのだ。

この装置の話を切り出されたのだ。



何故そんな事をと問うと、マージゴは
幾度も胸に触れた感覚で必要なのではと思った
と答えた。

だがある時から自身の扱いに勞わりを感じるようになった辺りでカルミアはこのマーゴからの執着心を感じたが故にその装置を受け取る事に抵抗感があったのだが

もし何かあったり氣に入らなかつたならば

殺して貰って構わないと言うマリー
不思議な何かを感じたカルミアは

そこでも何か不審な行動を取れば即座に始末する事を条件にそれを受け取ったのだった。

「でもこれのおかげでカルミアのエネルギー
無駄なく使えるんだしそこまで警戒する事無いじゃん。」

「アイシャはもう少し警戒心をもって……ひゃん♡！ふんっ♡……」

同じく誰かに強い執着を持つてゐる同族故に警戒してゐるといふ話なのだが、アイシヤは良くも悪くも警戒心が無い時があるのでそれを忠告しようとするが、軽く乳首を摘ままれるとそれも遮られる。

「んはっ、んはっ、それえ！また、出ちやついます……」

アイシャはその後も的確にカルミアの乳房を刺激し、幾度も絶頂へと導いた。今も乳首を絶妙な動きでカルミアが最も絶頂し易い加減で絞り摘み、もう少しで絶頂を迎えようとした頂きの直前でアイシャの手が止まる。

「はあ♡はあ アイシャ、なん…で…?」

「ん?、もう満足かなって。」

「ん…は、あの、まだ、その…。」

「まだ?、あれだけいったのにまだしてほしいの?。」

「は…はい…。」

「え、どうしよかな。」

「もう…いじわるしないで、もつと、さわつて…ください。」

手を止めたアイシャがもう終わりの雰囲気を出し始めたが、どうやら今回はまだ熱が全然引く感じがしない、見ればおそらくそれはアイシャも分かっているという表情をしている。

おそらく今回はそういう趣向なのだろう、そう察したカルミアはまだアイシャに触れて欲しい切なさに眉を寄せながらアイシャに懇願する。

「じゃあ、あたしの質問に正直に答えられたら続きをしてあげようかな、カルミア、あの箱、見える?。」



「出ちやおっ。」

「ふえっ？」

「…あい

シャ

いまは—!!」

と着信のボタンを押し更に
スピーカーフォンにしてしまう。



「もしもし、レン、どうしたの？」

「マスターに事情説明したらまかせとけつて。
でも勢いで出てきちゃったんで
何食べたいか聞くの忘れちゃつて。」

「ああ、そっか、うーん、
あたしはおつちゃんのおまかせで良いってお願いして、
レンは好きな頼みな。」

「うー！
（アイシヤ）今は……！」

レントと何気ない会話をしながら
ハンズフリーなアイシヤの手が
変わらずカルミアの乳房を刺激する。

「はい、
それでルミアさんは何がいいか分かりますか？」

「ん、今起きてるか確認してみるね。」



「かるみあく調子どーかなー？、起きてる？。」

「……♡……♡……♡！」



乳首を刺激するアイシャの指の動きが激しくなる、
先程までの優しい快感が一転激しいものになり、
堪らず嬌声が漏れそうになるが
カルミアはそれを堪える。

カルミアにとってレントは友人であり

可愛い後輩である、風に見てもらえている

のは嬉しいし心地好い、喘ぎ声を

聞かなくていいと思っただけで耐える。



「今日はやけに甘えるじゃん、さっきのプレイがよかった？もう二回レンに電話かけよつか？」

「あっ…今日のアイシャ、なんかいいじわるです。」

切なげに甘えてくるカルミアについSっ気が出てしまうアイシャはどうしようかな？等と言いながらもカルミアの前まで来ると。

「じゃあ目しっぴかり閉じて、あたしが良いっていうまで絶対に開けちゃだめだよ。」

「…っ、はいはい。」

言われ素直に目閉じたカルミアの頭をアイシャは両手で左右の耳を塞ぐように掴む。

（ちよつと激し目な方がいいよね。）

そしてカルミアの唇に自分の唇を重ね――。

